OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	巻頭言 : 看護実践能力の行方
Author(s)	阿曽, 洋子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2003, 9(1), p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56641
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

巻　頭　言

看護実践能力の行方
The future of Ability for Nursing Practice

平成14年３月に「看護教育の在り方に関する検討会」から、「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」という報告が出された。この意図は、大学による看護職者の人材育成が確実に社会の期待に応えられるものであるための看護教育の方向性を提示することにある。そこに掲げられた課題は、大学卒業者の看護実践能力の向上と看護職者としての社会的責任、国民の期待する看護の質的向上の３点である。それらのなかで、看護実践能力の育成についてみると、『看護実践を支える技術学習項目』を看護学教育内容のコアの重要な要素として提示している。そして、その要素は、『看護ケア基盤形成の方法』をベースとして『看護基本技術』を積み上げるという構成で成り立っている。看護技術の卒業時の到達度は、「技術項目、対象の状態などにより多様ではあるが、看護職者の確認・指導があれば自立してできるレベル」としている。

「看護技術が自立する」ということの概念を考えてみると、「看護技術」の概念と「自立」の概念の両方から考える必要がある。まず、「看護技術」は「看護」と「技術」に分解される。「技術」についてはアリストテレスの時代からカントの時代を経て、論争が繰り返されたなかで、「技術」の概念は計画（Plan）→実施（Do）→評価（See）のサイクルとして捉えられている。「看護」における「技術」も同様である。すなわち、看護計画→看護実践→看護評価の一連のサイクルとして考えられる。このことは、看護技術が実施するときの行為だけを指すのではないことを示している。一方、「自立」とは、広辞苑では「他のものから援助や管理を受けないで独立していること」と記載されている。したがって、看護技術の自立については、患者の状況を観察により的確に捉えて、何が必要であるかを判断して計画を立て、適切な方法で援助を行い、その結果がどうであるかを評価する能力が備わったときに、「看護技術は自立した」と言える概念である。

看護実践能力に関して、筆者らが1992年度から1994年度の３年間にＫ短期大学を卒業した学生の看護実践能力を就職後５年間追跡調査を行った。短期大学の卒業者ではあったが、現在の４年制大学への移行状況を考えると、調査結果はあながち異なるとは言えないと思うが、その結果では就職後３年で日常的な看護ケアはできるようになるが、総合判断などには自信がなく、なおサポートを必要としていることが明らかになった。このようなことを考えると、「看護教育の在り方に関する検討会」の卒業時の到達度は、現実的にみてレベルをどのように担保するかが課題である。

今後は、大学の特性を保持しながら看護教育を再検討していくとともに、大学と実習場との協働により今以上に臨地実習での学習を充実するための方策を検討することが重要であると考える。

大阪大学医学部保健学科
基礎看護学講座
阿　曽　洋　子